

「仕事と子育ての両立」体験

学生が子育て家庭にインターンすることで、働くことと家庭を築くことの両方を学べる「ワーク&ライフ・インターン」がある。そんなリアルな体験と学びを提供する企業「スリール」(東京都新宿区)を取材した。【お茶の水女子大・近藤芳香】

ワーク&ライフ・インターンを発案したのは、スリールの代表、堀江敦子さん(27)だ。子ども好きが高じて、13歳から100人以上のベビシッターを体験。子育て家庭の素晴らしさと苦悩を間近で見えてきた。大学では福祉学を専攻し、働く女性の「子育て支援を研究した。卒業後は大手企業に勤めるが、職場で、仕事と生活を両立する難しさの根本を見つけた。

当事者意識が大事

このインターンは「仕事と子育てを学びたい学生」と「子育てをサポートしてほしい家庭」がつながることが特徴だ。これにより、学生にはキャリア教育、家庭には子育て支援、社会には少子化対策という好循環の実現を目指している。特に就職を控えた学生には、仕事と生活の両立に当事者意識を持ってもらうことが狙いだ。

それは、若い人の仕事と生活の両立に対する当事者意識の低さだった。子育てと仕事の両立に苦労する先輩社員がいる一方で、具体的な改善を会社に訴えない若手社会人。漠然と将来に悩むものの、危機意識が薄いまま仕事漬けの毎日を送っている人が多かった。「もし、学生時代に仕事と家庭の両立にリアルに接し

ていれば、会社に入ってから子育てに優しい環境づくりに当事者意識を持てるのではないか」と思い、2010年の起業に至った。

「ワーク&ライフ・インターン」企業が学生と家庭橋渡し

る。家庭は月額3万円(時間換算1000円)をスリールに支払い、インターン生を受け入れる。研修後、学生は2人組になって特定の1家庭を月6回、3カ月間訪れる。主に「親の帰宅までの間、子どもの食事、風呂、寝かしつけなど全般の世話を行う。インターン中は、家庭で親から仕事の話を聞いたり、インターン生全員で将来を考えたりする時間もある。また、3カ月間のプログラムを卒業すると、謝礼付きで多くの子育て家庭を見られるようにもなる。現在、受け入れ家庭は、東京近郊で1歳から小学3年生まで(3カ月のプログラムは2歳以上)の子どもがいる。

受け入れ側にも好評

利用した家庭からは「子どもを預けることが消費から投資になった。自分の時間ができ、子どもが成長する。そして学生が成長することが社会への投資になった」と高評価だ。今では、口コミなどで広まり、30代の共働き家庭を中心に約40家

庭が利用している。インターン終了後は「次はどんなお兄ちゃんやお姉ちゃんが来てくれるの?」と親子で満足度は高い。友人に誘われて参加した文教大人間科学部4年、石川麻波さん(21)は「引込み思案で子どもと関わるのが苦手だったが、素直になれば距離が縮まることを知った。社会人の家庭を学ぶだけでなく、人としても成長できた」と振り返る。これまでインターンを体験した学生は延べ100人。男女比は1対9の割合だ。

このインターンで多くの学生が成長していく様子を

を見て、「学生時代は人生の基礎を作る大事な時期。いろんな大人、価値観に触れて自分の軸をつくるのが大切だ」と堀江さんは言う。社会人になることは、仕事に就くと同時に生活の作り手になることでもある。働く人の生活を間近で見ることは、卒業後に描く姿を改めて考えるきっかけとなりそうだ。



訪れた家庭で、子どもとクリスマスケーキ作りに取り組みインターン生たち「スリール」提供